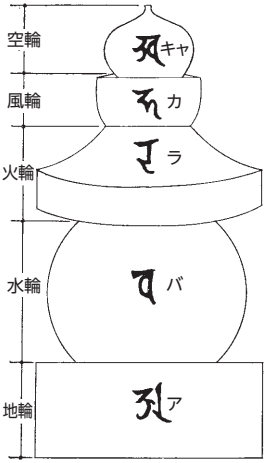
# 取産香遺

Vol.84

## 「五輪塔」全国的に流行した石造供養塔



▲来迎寺（貝塚）の五輪塔

中世から近世にかけて建てられた石造供養塔のうち、最も一般的に知られているのが五輪塔ではないでしょうか。五輪塔は、下から方形（地輪）、円形（水輪）、三角形（火輪）、半円形（風輪）、宝珠形（空輪）の5つの部材で構成されています。これは、古代インド仏教において、宇宙は地・水・火・風・空の5つの元素で形成されるという思想（五大思想）によるものと考えられています。我が国では、平安時代中頃に真言密教と結び付き、大日如来を本尊とする供養塔として五輪塔の形態が生まれました。

各部材の東西南北各面には大日如来の真言を梵字で刻む（四方梵字）のが本来ですが、正面のみに東方の発心門である「キャ・カ・ラ・バ・ア」を刻むものが多数を占めます。また、宗派によっては「妙・法・蓮・華・経」「南・無・阿弥・陀・仏」「空・風・火・水・地」などの漢字が刻まれているものや、まったく文字を刻まないものもあります。

現在のところ、我が国最古の石造五輪塔は、岩手県平泉の中尊寺にある仁安4年（1169）のものです。鎌倉時代以降になると全国的に造立が盛んになり、時代を経て現代に至るまで供養塔や墓石として造られています。

市内にも多くの五輪塔が見られます。上の写真は貝塚区の来迎寺にあるもので、市内にある五輪塔の代表例といえます。中央の大きなものは松平外記伊昌の正室・ふうの方の墓石で、高さは約2・1m、各部材の4面には四方梵字が刻まれ、寛永19年（1642）に造立されたものです。松平外記伊昌は三河の旗本で、徳川家から銚子飯沼に二千石を拝領し、飯沼陣屋が完成するまで来迎寺を仮陣屋としました。ふうの方は81歳で飯沼陣屋にて死去し、浄土宗に帰依していたため当寺に葬られたといわれています。

**問い合わせ**
生涯学習課 ☎(50)1224